

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団

2018年度（前期）指定公募
「在宅医療推進のための学会等への共催」完了報告書

「日本ルーラルナーシング学会第13回学術集会」
瀬戸内の島で生きるを支える

団体名：日本ルーラルナーシング学会

申請者：日本ルーラルナーシング学会第13回学術集会長
香川大学瀬戸内圏研究センター
大西 美智恵

提出年月日：平成30年12月10日

1. 開催概要

会 期：2018年11月3日（日）

会 場：かがわ国際会議場・サンポートホール高松

テーマ：瀬戸内の島で生きるを支える

2. 参加者数

事前参加・当日参加者 201名

・会 員 93名

・非会員 50名

・学 生 58名

開催関係者 73名

・ボランティア学生 49名

・講師・招待者 11名

・スタッフ 13名

総計 274名

3. プログラム

第1日目：11月3日（土）

■会場：国際会議場エントランスロビー

9：00～16：45 総合受付

■会場：国際会議場

9：30～ 9：45 オープニングセレモニー

大西美智恵（日本ルーラルナーシング学会 第13回学術集会会長）

9：45～10：30 基調講演

島しょ部における遠隔医療の今後

講師 原 量宏（香川大学 瀬戸内圏研究センター 特任教授）

（香川大学 名誉教授）

（日本遠隔医療学会名誉会長）

座長 大西美智恵（香川大学 瀬戸内圏研究センター）

10:40～12:30 シンポジウム

変わらないために変わっていく

シンポジスト 白神 悟志 (丸亀市国民健康保険広島診療所 医師)
小澤 詠子 (小豆島中央病院 豊島健康センター 看護師)
一井眞比古 (社会福祉法人恩賜財団済生会 香川県済生会 支部長)
小野 正人 (株式会社かもめや 代表取締役)
座長 大湾 明美 (沖縄県立看護大学)
坂東 瑠美 (NPO 法人いけま福祉支援センター)

12:30～13:15 休憩

13:15～14:45 ワークショップ

■会場：国際会議場

1-1 中山間地域における多職種協働による地域包括ケアのあり方
ー住民自治組織による認知症地域ケアの取り組みー
世話人 岡田 麻里 (県立広島大学)

■会場：サンポートホール6階62会議室 (学術集会招待ワークショップ)

1-2 訪問看護の支援システム「ケアラクスル」について
在宅ケアの充実と業務の効率化
世話人 田淵 悦子 (城山訪問看護ステーション)

■会場：サンポートホール6階63会議室

1-3 山間へき地および離島における救急医療・看護に対する看護職の教育ニーズ
ーワールド・カフェの手法を用いてお互いの考えを共有しようー
世話人 中村 美鈴 (東京慈恵会医科大学/自治医科大学)

■会場：サンポートホール6階64会議室

1-4 瀬戸内海の島の地理的特性と保健師活動
世話人 田中美延里 (愛媛県立医療技術大学)

■会場：サンポートホール6階65会議室 (学術集会招待ワークショップ)

1-5 小さな場所を軸としたコミュニティづくり
世話人 額賀 順子 (特定非営利活動法人 男木島図書館)



ワークショップの一コマ

14:50～15:50 一般演題 口演発表

■会場：国際会議場

- 「島で育つ・生きる・死ぬを支える」 座長：石垣 和子（石川県立看護大学）
- 2-1 ミクロネシア連邦チューク州ピス・パネウ（Piis-Paneu）島の母子保健の現状
谷口 光代（京都学園大学健康医療学部看護学科）
- 2-2 離島の混合病棟における退院支援に関わる看護師の困難に関する研究
加藤真紀子（隠岐広域連立立隠岐病院）
- 2-3 A島におけるがん終末期の認知症居高齢者の在宅エンドオブライフへの支援
ー在宅療養に向けた倫理調整を中心にー
石垣 淳子（地域医療振興協会 公立久米島病院）
- 2-4 離島での家族による終末期ケアの関わりから見えるもの
山口 庸子（島根県隠岐広域連立立隠岐島前病院）
- 2-5 A大学附属病院のジェネラリストナースのキャリア開発
福田 順子（自治医科大学看護学部）

13:30～15:50 一般演題 示説発表

■会場：サンポートホール6階61会議室

13:30～14:05 一般演題 示説発表 (P3-1)

- 「情報通信技術を用いて学ぶを支える」 座長：大塚真理子（宮城大学看護学部）
- P3-1-1 小離島の看護職をつなぐ ICT による症例検討会の開催とその評価
下地 和枝（沖縄県立南部医療センター・こども医療センター）
- P3-1-2 看護師特定行為研修における実践教育への ICT 活用の有効性
鈴木美津枝（自治医科大学看護学部）
- P3-1-3 看護師の遠隔学習を支援するトライアルコースの検討
村上 礼子（自治医科大学看護学部）
- P3-1-4 e-learning を活用した学習活動からみた
へき地に暮らす看護職に対する学習支援の検討 ー第2報ー
藤巻 郁朗（自治医科大学看護学部）
- P3-1-5 e-learning 導入による模擬患者養成プログラム開発
湯山 美杉（自治医科大学看護学部）

■会場：サンポートホール6階61会議室

13:30～14:05 一般演題 示説発表 (P3-2)

- 「ふるさとの力が支える」 座長：成田 伸（自治医科大学看護学部）
- P3-2-1 沖縄県出身ボリビア移民1世高齢者の「心の支え」
佐久川政吉（公立大学法人 名桜大学 人間健康学部看護学科）

P3-2-2 豪雪地帯に暮らす独居後期高齢者のストレングスの把握

－Aさんの事例から－

大口 洋子（新潟県立看護大学）

P3-2-3 「ふるさと」を活かした高齢者への協働による島のケア力

美底 恭子（沖縄県立八重山病院附属波照間診療所）

P3-2-4 助け合いによる台風時の在宅要介護高齢者の支援の課題

坂東 瑠美（NPO 法人いけま福祉支援センター）

P3-2-5 島嶼地域に住む高齢者に対する社会貢献活動を通しての学びと

社会人基礎力の変化

吉屋 寿則（訪問看護ステーションおおさき）

14：05～14：40 一般演題 示説発表（P4-1）

「地域包括ケアの構築を支える」 座長：波多野浩道（藍野大学医療保健学部）

P4-1-1 過疎地域における住民と共に創り上げる地域包括ケア推進への取り組み

岩淵 光子（岩手県立大学看護学部）

P4-1-2 認知症の人にやさしい地域包括ケアシステム開発のための強みと課題の把握

－沖縄県北部地域B区における1年目の活動から－

安仁屋優子（名桜大学 人間健康学部看護学科）

P4-1-3 認知症支援困難事例から始まる小地域と大学との協働による

地域包括ケアシステム構築の試み（第1報）

－介入準備期におけるZ区の強みと課題－

下地 幸子（名桜大学 人間健康学部看護学科）

P4-1-4 配食業者によるICTを活用した在宅高齢者の見守りシステム構築に関する調査

－配食スタッフの視点からの効果の検証－

羽左間成美（公立穴水総合病院）

■会場：サンポートホール6階61会議室

14：05～14：40 一般演題 示説発表（P4-2）

「地域で暮らすを支える」 座長：山崎不二子（福岡女学院看護大学看護学部）

P4-2-1 群馬県における精神科訪問看護師の職務満足感と離職意向の実態

大澤真奈美（群馬県立県民健康科学大学看護学部）

P4-2-2 離島の精神巡回診療に関わる看護師の役割

－病院に迎え入れる支援と島に送り出す支援の看護実践から－

上里さとみ（特定医療法人葦の会）

P4-2-3 離島であるA島における訪問看護ステーションの活動報告

－これまでの活動状況と今後の展望－

濱崎 彩子（訪問看護ステーションQちゃん）

P4-2-4 瀬戸内の離島における健康支援活動の現状と課題

三浦 雅美（済生会松山訪問看護ステーション）

P4-2-5 島民が安心して暮らし続けられる島を目指して

－ヘリ搬送分析から見えたこと－

彦坂 弓子（公立久米島病院）

14:40～15:15 一般演題 示説発表（P5-1）

「地域文化ケア力が支える」 座長：佐久川政吉（名桜大学人間健康学部看護学科）

P5-1-1 公立A病院看護職者による高齢者への地域文化ケアの評価

呉地祥友里（元沖縄県立看護大学看護学部）

P5-1-2 糖尿病の島しょ的・地域文化的自己管理支援のヒント

仲宗根洋子（元沖縄県立看護大学看護学部）

P5-1-3 農漁村の地区組織で活動する中高年者の子育て支援に関する意識と行動

吉田 知令（伊方町 保健福祉課）

P5-1-4 カンボジア王国における保健衛生指導プロジェクト実践報告

辻 よしみ（香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科）

■会場：サンポートホール6階61会議室

14:40～15:15 一般演題 示説発表（P5-2）

「保健師活動を支える」 座長：田村須賀子（富山大学大学院医学薬学研究部）

P5-2-1 住民が山間へき地に住み続けるための保健師活動の特徴

伊丹 幸子（健康科学大学看護学部）

P5-2-2 中山間地域における独居高齢者への保健活動と今後の課題

－A村の「ふれあい昼食会」の事例から－

西河 浩司（佐那河内村役場）

P5-2-3 小離島で働く保健師が保健活動を通して得た学びの実態

辻 京子（香川大学医学部看護学科）

P5-2-4 離島町村で働く新任期保健師の看護実践能力の向上につながる経験

青木さぎ里（自治医科大学看護学部）

P5-2-5 山間部で活動する新任期保健師の成長の歩み

山下 歩（三好市役所）

15:15～15:50 一般演題 示説発表 (P6-1)

「悔いなく生きるを支える」 座長：中村 美鈴（東京慈恵会医科大学）

P6-1-1 へき地医療拠点病院で退院支援をおこなう看護師の実態と課題

－関東圏内にあるA病院の実態からみえた課題－

平野 知子（南那須地区広域行政事務組合立那須南病院）

P6-1-2 受講修了生を対象とした現地訪問調査からみた e-learning 科目

「退院支援・調整と多職種連携」の成果と課題

塚本 友栄（自治医科大学看護学部）

P6-1-3 独居がん療養者の看取りにおける訪問看護師の看護実践

－エンド・オブ・ライフ・ケアの6つの焦点からの文献検討－

柄澤 邦江（長野県看護大学看護学部）

P6-1-4 重症心身障害者と中山間地域で暮らす高齢者家族への別居型多重介護の実態

－予期せぬ看取りを経験した一事例より－

諏訪亜季子（香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科）

■会場：サンポートホール6階61会議室

15:15～15:50 一般演題 示説発表 (P6-2)

「過疎地域の看護を支える」 座長：安田貴恵子（長野県看護大学看護学部）

P6-2-1 北海道のへき地医療拠点病院で働く看護師の語りを通してみた看護の現状

藤田 寛（北見赤十字病院）

P6-2-2 過疎地域にある中小規模医療機関の看護の強み

蘇武 彩加（岩手県立大学看護学部）

P6-2-3 小離島における看護職者の協働連携推進モデルの提案

－診療所看護師と行政保健師との協働連携の実践事例から－

大湾 明美（沖縄県立看護大学看護学部）

P6-2-4 地域ケアスキル・トレーニングプログラム

高齢者の急変時における看護実践演習の教育効果の検討 ー第2報ー

中野真理子（自治医科大学看護学部）

P6-2-5 遠隔地の看護師の受講可能性からみた特定行為研修の課題

関山 友子（自治医科大学看護学部）

16:00～16:45 学会総会

■会場：国際会議場

16:45～ 閉会式

■会場：国際会議場



示説（ポスターセッション）の様子

基 調 講 演 「島しょ部における遠隔医療の今後」

講 師 原 量宏 (香川大学 瀬戸内圏研究センター 特任教授)
(香川大学 名誉教授)
(日本遠隔医療学会名誉会長)

座 長 大西美智恵 (香川大学 瀬戸内圏研究センター)

遠隔医療の概念は時代とともに大きく変遷してきました。通信方法が従来の電話回線に限られていた時代(1990年代以前)には、低画質の静止画、心電図や血圧などの伝送に限られており、それらの情報を遠隔の医療施設、あるいは在宅の患者の医療に役立てようとするものでした。その後、光ファイバーによるブロードバンドやモバイルの通信基盤を利用したインターネットの普及により、心電図や血圧などのバイタル情報はもちろん、CT、MRI や高精細の動画伝送など、診断に耐える医療情報の伝送が可能になり、遠隔医療、在宅医療とともに遠隔診断という言葉が使われるようになりました。

CT、MRI など画像系の診断機器と並行して、電子カルテの普及も急速に進み、大学病院や中核病院はもちろん、中小の医療機関にも導入され、電子カルテを相互に結ぶ、地域医療ネットワークが全国に普及しつつあります。Web を通じた TV 会議システムの機能も急速に進歩し、小型化された医療機器とタブレットやスマートフォンと組み合わせることで、医師、看護師等と患者が、容易に双方向の情報交換をできるようになっています。

政府は遠隔医療に関しての規制緩和を積極的に進めており、「未来投資会議」では、新たな成長戦略として、質が高く効率のよい医療や介護の実現にむけて、ICT を用いた遠隔診療の拡大や診療報酬の改定を重要な課題としており、現在厚生労働省が積極的に進めている地域包括ケアシステムの体制を進める中で、ICT を用いた在宅医療、医療と介護の連携が急速に進みつつあります。特に、本年4月に、厚生労働省により遠隔診療が認められ、オンライン診療料として診療報酬が新設されたことは特記すべきことで、今後急速に遠隔診療が普及していくと思われます。

香川県は、人口約100万人の全国で一番狭い県ですが、24の有人離島のほか、県内各地にへき地が点在し、年々高齢化が進行しています。特に小豆島地域の高齢化率は急速で、2025年には47.2%となると予想されています。香川県の医療資源に関して、高松市など都市部は、全国平均を上回っていますが、島しょ部・へき地では都市部に比較し大幅に少なく、医療水準の確保が大きな課題となっていました。そこで、2003年に香川県は、香川大学、香川県医師会と一体となって、現在の全国の地域医療ネットワークのモデルとなる「かがわ遠隔医療ネットワーク(K-MIX)」をスタートさせました。そしてさらに10年目の節目の2013年には、K-MIXの機能を大幅に増強して「かがわ医療情報ネットワーク(K-MIX+)」として新たに稼働させています。

K-MIX+ では、16の中核病院の電子カルテの診療情報が参照できるだけでなく、瀬戸内海を巡回して、離島の住民の健康診断を担当している済生丸の検診情報（胸部写真、胃がん検診、心電図等）をK-MIX+を介して参照することができ、離島の住民の健康管理にも大変役立っています。



基調講演の様子

シンポジウム

「変わらないために変わっていく」

シンポジスト 白神 悟志（丸亀市国民健康保険広島診療所 医師）
小澤 詠子（小豆島中央病院 豊島健康センター 看護師）
一井眞比古（社会福祉法人恩賜財団済生会 香川県済生会 支部長）
小野 正人（株式会社かもめや 代表取締役）
座 長 大湾 明美（沖縄県立看護大学）
坂東 瑠美（NPO 法人いけま福祉支援センター）

丸亀市国民健康保険広島診療所

医師 白神 悟志

瀬戸内海の中央やや東側に位置する塩飽（しわく）諸島、その中のひとつである広島という人口 200 人足らずの小さな島の診療所での医療・看護の様子を紹介する。

看護師は通常の外来診療・訪問診療・緊急往診・院内の薬剤管理などの他に、近年増加している認知症で一人暮らしの島民の生活支援に至るまで非常に多岐に渡る内容の業務を少人数でアクティブに行っている。

看護師達の行為と思考の全ては、昔から変わらぬであろう看護の基本姿勢である「寄り添う」という概念に常に立脚している。しかし、時代の変遷は、「寄り添う」ために必要とする新しいスキルやより深遠な知識への追従をいつも要求し続けている。

その要求に忠実に答えようと奮闘している離島の小さな診療所に勤務する看護師にとって、多くの制約下においても実現可能な生涯教育の最適な方法や、同様な立場・環境にいる他の地域の（本学会会員のような）看護師の皆さんと様々な情報共有を行いながらの知識のブラッシュアップや、さらに、同じ仲間がいることで得られる安心感や連帯感への希求は高く、これらは職務遂行へのモチベーションの維持にも不可欠と思われる。

また、時代のニーズにより総合診療専門医が誕生したように、看護協会が取り組んでいるナース・プラクティショナー制度の確立は、特に離島・僻地における医療ニーズに答えるためにも早急な実現が望まれる。本シンポジウムにおいて上記の様々な課題の解決策を会場の皆さんと共に探りたいと考えている。

「住み慣れた地域で暮らし続ける」ことは「生きあい、死にあう」ことができる ということ

小豆島中央病院 豊島健康センター

看護師 小澤 詠子

1. 豊島の概況（保健医療福祉分野） 面積 14.5 km²、人口約 800（高齢化率約 50%）の豊島は、小豆島の西 3.7 kmに位置し、県庁所在地高松市から定期高速艇（3～6 便/日）で約 35 分です。歴史的に海上交通・物流の要だった瀬戸内海を背景に分断と合併が繰り返されてきた豊島では、3つの集落ごとの自治がいまも半ば健在ですが、2018年現在、行政的には小豆島の一部、つまり小豆郡土庄町豊島＝「豊島地区」として土庄町（人口約 13,300）の一部としてあり、島内の行政機能は出先である公民館が担っています。

「豊島地区」は地域包括ケアシステム上の日常生活圏域（中学校区）でもありますが、島内に地域包括支援センターや居宅介護事業所はないため、町所属のケアマネジャー2～3名が豊島地区を兼任し、船通いでカバーしています。また、訪問介護員（ホームヘルパー）は常勤1名（67歳）で、週に約10～18件（約5～9名）のサービスを提供しています。24時間体制の施設としては小規模特養^{注1}（定員30）が唯一あります。私は、小豆島中央病院所属の常勤看護師として豊島（巡回）診療所に配属されており、そこで救急を含む外来を「守り」つつ訪問をし、医師（自治医科大学卒・県「へき地医療センター」所属）をはじめ院外薬剤師やケアマネジャー、ヘルパー、特養、町関係課、自治会、民生委員、警察、金融機関、郵便局、他院地連等と連携をとることで、種々の事例や地域課題を介し、「住み慣れた地域で暮らし続ける」ことができる地域づくりに向きあっています。

2. 「包括ケア」の内容

1) 事例紹介

- (1) 継続看護にドラマをみる視点から
- (2) 認知症に問われる視点から
- (3) 施設の役割を再発見する視点から

2) パートナーの多様性と自己の専門性

(1) パートナーシップ

- ・ 連携の前提は院内外でのチーム医療ができていいる・し続けること
……緩急ある臨床では相談・信頼しあえる足もとが大事
- ・ 地域資源⇄顔のみえる人間関係
……人柄や仕事ぶりを見知っていることで、「何をどこまで頼れるか」が見えてくる
- ・ 医師の言語化能力に頼る
……同じ現実をみている Dr. に現状を描き出してもらい、課題整理（体系化・意味付）につなげる

(2) 患者家族の重要性（高齢者の場合）

- ・ 「子どもに迷惑をかけない親でありたい」気持ちを理解し
「かける迷惑」にともに挑戦する姿勢……一種の「共犯者」となる
- ・ 支援者が島内外の家族とつながることで初めてみえてくる本人像がある
……新たな道しるべとしうる

3) 「本人の選択と本人・家族の心構え」を醸成するプロセスそのものが
包括ケアという視点

- ・ 大切なのは居住形態ではなく本人の（人生への）納得感・・・
……本当に理解しておいてほしい人を知り理解をつなぐ
- ・ 「家で独り逝きたい」という願いは介護保険制度の下では叶えにくいという
「現実」にあがく……「本人の選択」を審判しない

3. 地域づくりに向きあう

要介護のため島を出ざるをえず、その最期が尻切れトンボのように地域で語られる人も増えています。また、平成30年度介護報酬改定^{注1)}等の逆風もあり「住み慣れた地域で暮らし続ける」ことができなくなる「危機」に直面しています。これに対し、ニーズ調査、地域協議会の設立努力等の打開策を現在模索しています。

離島へき地での「包括ケア」の過程でぶつかる障壁の一つは、医療福祉資源の少なさです。「地域づくり」は、これを支援の限界と諦めず制約と捉え直して、その制約を少しでも押しひろげたり見方を変えたりして、その地域で遂げることのできる個々の人生の願いをたぐりよせる営みのように思います。島内でともに老いた隣人の生きざま死にざまをお茶の肴に語りあう高齢者の表情、一挙手一投足には豊かで厳格なものがあります。豊島で3年前に制作されたドキュメンタリー^{注2)}で、「生きあって、死にあってもいる」と述べた私の言葉の意味をずっと考えていたというディレクターが、撮影終了後に「もしかしたら、それが“救い”なのですね？」と返してくれました。島で老いて逝く人々を「美しい」と表現した視聴者もいました。

人々が生きた地域には、彫琢されてきた記憶と風景があり、これを糧に現在を生活している人が少なからずいます。看護師として見聞した入退院時等のリロケーションダメージを思えば、「住み慣れた地域で暮らし続ける」ことの意義は問うまでもなく領けますが、実はもっと積極的な意義、言うなれば、お互いが人間として響きあえる瞬間や場面の創造という魅力が潜んでいるようにも思います。ルーラルエリアでの看護は、そうしたことに最も近い距離にあるのではないのでしょうか。

注1) 介護報酬改定史上今回はじめて着手され廃止統合の俎上にあがった「小規模特養（従来型）」．基本報酬で－4.3%の経過措置となった（要介護3）．

注2) 2015年山陽放送制作『島の命を見つめて～豊島の看護師うたさん～』（56分）．

瀬戸内海離島民の健康を支える済生丸

社会福祉法人恩賜財団済生会

香川県済生会 支部長 一井 眞比古

1. 済生会とは

1911年（明治44年）に恩賜財団済生会が設立された。本会の使命は、生活困窮者への支援、地域医療への貢献及び総合的な医療と福祉サービスの提供である。1952年に社会福祉法人となり、現在の総裁は秋篠宮殿下である。40都道府県に支部があり、375施設（病院と福祉施設等）で医療福祉活動を行っている。職員数は約58,000人、事業活動実績は6,600億円である。

済生丸による瀬戸内海島嶼巡回診療事業

岡山県、広島県、香川県、愛媛県の4県済生会支部による共同事業

対象地域：岡山県、広島県、香川県、愛媛県の64島と1地区の合計88カ所

備讃瀬戸から宇和海まで

対象人口：22,000人（人口300人以下の島が70%、人口100人以下の島が30%）

2. 済生丸とその活動

○4代目「済生丸100」就航（2014年） 建造費：660百万円

総トン数：180トン 全長：33m 幅：7m 航海速度：12.3ノット

定員 船員：5名、診療班：24名、臨時乗員：21名

医療設備：診察室（2）、検査室、採血室、レントゲン室、処置室、待合室

その他設備：エレベーター、バリアフリートイレ

○設置医療機器：自動血圧計、解析付心電計、胃部透視撮影装置、胸部X線、超音波検査
婦人科検診台、眼底カメラ、骨密度測定器、マンモグラフィー
生化学自動分析装置

○健診事業：予防医学をめざして

・診療島嶼延数：191（64島）、診療日数：169日、受診延人員：8,275人

・健診内容：血液検査、血圧測定、検尿、心電図、胸部（間接）、胃部（間接）

腹部超音波検査、肺がん検査、胃がん検査、骨密度検査、保健・栄養指導

・多くみられる疾患（2017年度実績）：内分泌、栄養及び代謝疾患（18%）

循環器系の疾患（28%）、呼吸器系の疾患（2%）、消化器系の疾患（12%）、

尿路性器系の疾患（6%）、血液・造血器の疾患及び免疫機能の障害（3%）、

その他（31%）

○医学科、看護学科の学生実習受入等

3. 今後の課題

人口減少と高齢化のさらなる進行、技術の高度化及び情報化社会の進展を踏まえた医療と福祉のあり方。

瀬戸内の空から離島の生活に革命を
～ 無人物流網がつくる、未来の島暮らし ～
「島国型ハイブリッド無人物流プラットフォーム」

株式会社かもめや
代表取締役 小野 正人

【企業紹介：株式会社かもめや】

代表取締役 小野 正人

離島・僻地マニア。インターネットプロバイダや移動体通信事業者で、インターネット黎明期よりインフラエンジニアとして日本の情報通信網の普及に貢献。ライフワークである離島・僻地めぐりを続けるうち、交通・物流事情の悪さを目の当たりにし、ドローンによる物資輸送を着想する。

■離島が直面する問題を解決したい

日本は世界的に見ても、面積あたりの離島数が非常に多い離島大国です。その数、6852 島。そのうち 418 島が有人島です。私たちがプロジェクトを展開している瀬戸内エリアには 727 の島々が点在しており、このうち、有人の 145 島の中には人口 100 人に満たない小さな島が 49 島あります。少子高齢化に伴い、効率化のため定期便は縮小傾向にあり、生活物資の輸送をチャーター船や自家用船、漁船に依存しています。貨物輸送には多くのコストと時間がかかり、日用品や医薬品の調達にも不自由しているのが現実です。当社は、こうした島の問題を無人物流機で解決することを目的に香川県高松市で設立されました。

■船に代わってドローンで物流を担う

これまで『KamomeAir プロジェクト』として、ドローン『カモメコプター』と無人貨物船『ドンブラコ』、無人走行車『スマート・オンパ』を組み合わせた新しい物流ネットワークの構築を目指してきました。2015 年 1 月に日本初の長距離（8km）海上貨物輸送実証実験に成功し、また 2015 年 9 月には物資輸送・遠隔医療及び医薬品輸送・危機管理の 3 分野複合実証実験に参加し、無人機による海上物資輸送の国内最長記録（片道 10km：往復 20km）を達成しています。

■クラウドファンディングで資金調達

これらの実験費用は、クラウドファンディングやファンドを通じて支援をいただき、1,116,000 円の資金調達に成功しました。また、READY FOR OF THE YEAR 2015「READY FOR Local CHALLENGE」や、香川大学主催の香川ビジネス&パブリックコンペ 2016「地域公共部門グランプリ」を受賞しています。

■今後の事業展開

瀬戸内海エリアで実績を積み、ゆくゆくは離島が多く存在する長崎や沖縄、さらにはインドネシアやフィリピンのような島国に広めていくことを計画しています。どんな離島に住んでいても 24 時間 365 日品物を受け取れ、島で出来た特産品も消費地に送り出せるようなネットワークを構築することで、地方創生に貢献していきます。

〈会社概要〉

設 立：2016年4月19日

所 在 地：香川県高松市林町2217番地44 ネクスト香川303

資 本 金：29,191千円（株主：経営陣、VC他）

役 員：小野 正人、八木 俊則、真鍋 康正

事業内容：島国型ハイブリッド無人物流プラットフォームの開発



壇上のシンポジストと座長



シンポジウム会場の様子



学術集会会場からの瀬戸内海の眺め

4. 学会終了後の効果

- ①アンケート調査の結果、学術集会の全体的な評価として、「とても良かった」と「まあ良かった」を合わせて86.2%と高評価を得た。
- ②今回の学術集会は瀬戸内で初めて開催したため、日本ルーラルナース学会を周知することに大いに役立った。また、学術集会の開催を機に学会に入会した看護職も多く、島への関心も高まった。
- ③瀬戸内海沿岸の都市で開催したことで、内海にある島の課題が見え、離島といえども外海と内海にある島の違いを理解する良い機会となった。
- ④日本全国から参加していることもあり、学術集会が離島の医療や福祉について情報交換する場となり、終了後も情報交換が続いているケースもある。
- ⑤行政や看護協会に学術集会の後援をしていただいたことで、ルーラルナース学会に関心を持っていただく機会となった。

5. 学会を終えて

まずは、天候に恵まれ、美しい多島海である瀬戸内海をご覧いただくことができたことが幸運であった。島々が地方都市のすぐそばに見えるという、瀬戸内海ならではの風景から、内海の島々の事情がイメージしやすかったのではないだろうか。

多くの方々や機関にご協力いただき、実り多い学術集会となった。特にエクスカージョンでの済生丸の乗船見学は、多くの参加者が希望していたことでもあり、大いに満足され

たようである。学術集会のみでなく、エクスカージョンで開催地の歴史や先進的な活動を見聞・体験することが加味された本学会の強みの現れでもある。

最も苦慮したことは、一般演題締め切りと同時期に西日本豪雨災害があり、演題が集まらなかったことである。瀬戸内海沿岸の各県で甚大な被害が出て、参加対象となる看護職も被災者となったり、被災地支援に向いたり学術集会どころでないという雰囲気であったため、演題登録の声掛けもはばかられた。この状況を学会の理事や評議員に説明して協力を呼び掛けたところ、日本全国から多くの演題登録の申し込みがあり安堵した。

次に、会場確保のため2年前から準備を開始したが、一般演題やワークショップの演題数がほぼ決定するのは学術集会開催の4か月前であったため、会場の最終締め切り時の申し込み部屋数の判断に苦慮した。会場費が高額であるため、無駄な部屋を借りるわけにもいかず悩んだ。

勇美記念財団や高松観光コンベンション・ビューローからも助成金を受け、学術集会を運営することができた。開催に係る経費については不安であったが、8月に勇美記念財団からの入金があり会場費等の支払いを無事終えることができた。

学術集会当日、勇美記念財団より常務理事様のご参加をいただきました。遠方よりお越しいただきありがとうございます。つきましては、ご感想等お教えいただければ次年度開催の学術集会长および学会理事会で報告させていただきたく存じます。

本学術集会は、公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成をいただき開催しました。